第五福竜丸物語

死の海をゆく

長谷川　潮

著者紹介　長谷川 潮(はせがわ うしお)

1936年、東京に生まれる。学童疎開で福島県へ行ったのを手始めに、長野、鹿児島、宮崎各県を転々とする。法政大学文学部通信教育課程卒業。国際基督教大学図書館に勤務するかたわら、児童文学の研究・評論にたずさわっている。共著書『児童文学創作講座　第4巻』(東京書籍)

現住所　東京都多摩市貝取4-1-2-902

画家紹

奈良　　明大学卒業、同研究生修了。在学中より木版でお祭の絵や民話絵本を作る。主な作品に「さるとひきのもちあらそい」「世界でいちばんつよい赤んぼう」(以上 文研出版) などがある。京都市在住。

死の海をゆく —第五福竜丸物語
文研じゅべにーる

著　者　長谷川 潮
発行者　佐藤武雄
印　刷　岩岡印刷株式会社
製　本　倉橋製本株式会社
発行所　文研出版
東京都文京区向丘2－3－10　〒113
電話 03－814－2151
大阪市天王寺区大道4－3－25　〒543
電話 06－779－1531

NDC913

© 1984.7 U.HASEGAWA

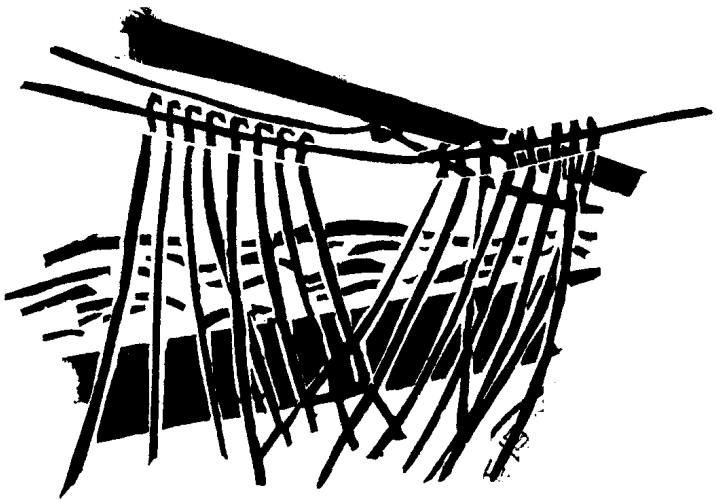
死の海をゆく —第五福竜丸物語
文研出版　1984
208p　23cm　菊判　(文研じゅべにーる)

〈検印廃止〉
●落丁・乱丁はおとりかえします。
●定価はカバーに表示してあります。

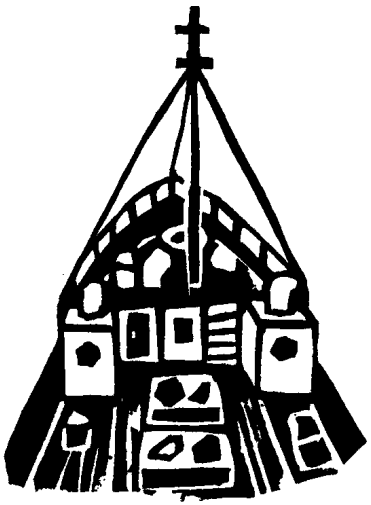
第五福竜丸物語

死の海をゆく

長谷川　潮



文研出版



●もくじ

物語のはじめに ―― 6

1 ミクロネシアの悲劇(ひげき) ―― 9

2 一九五四年一月、焼津(やいづ) ―― 23

3 追われる人々 ―― 35

4 第五福竜丸の不運な操業(そうぎょう) ―― 43

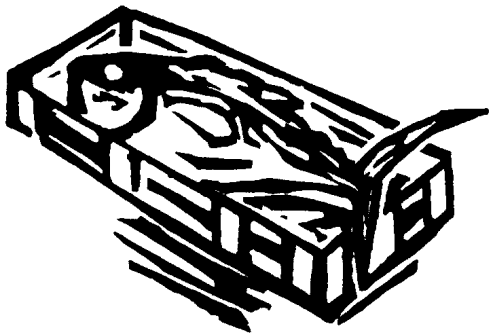
5 西空にのぼる太陽 —— 53
6 原子爆弾を作った人々 —— 64
7 焼津協立病院大井医師（おおいいし） —— 73
8 「歴史的なスクープ」 —— 86
9 ウラン二三七 —— 103
10 公海の自由 —— 111
11 二つの病院で —— 122
12 「放射能（ほうしゃのう）の海」 —— 137
13 放射能の夏 —— 150
14 漁民の死 —— 165
物語のおわりに —— 176
あとがき —— 205

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

カバー・表紙デザイン＝南江津子
木版画＝南江津子
レイアウト＝村治田鶴子
版下＝三美社
写真提供＝共同通信社
第五福竜丸平和協会
シンコーフォト・サービス
大石又七

——第五福竜丸物語——

死の海をゆく

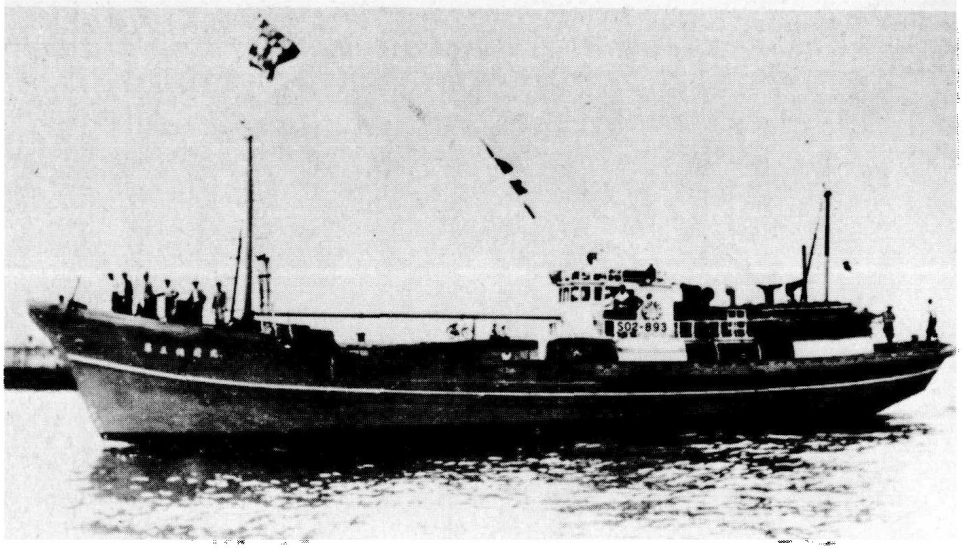


物語のはじめに

第五福竜丸は、静岡県焼津港を母港としていたマグロ延縄漁船である。総トン数は一四〇トン（登録書類上は九九・〇九トン）で、当時のマグロ延縄漁船としては中型のものだった。漁獲物は満載すれば六〇トンくらいつみこめたし、二十人以上がのりくんで二か月間も航海できるだけのエンジンの燃料や食料、生水などを載せていけるのだから、けっして小さな船ではない。

船というものは遊園地のボートなどとはちがって、喫水線（船体が水にうかんだときの水面ぎわの線）から下があんがい深いのが普通で、第五福竜丸にしても船底とおなじ平面に立って見上げると、船べりは二階家のひさしぐらいのところにある。

しかし何万トンもの巨船はむろんのこと、数千トン程度の船とくらべても心細いほど小さいことはまちがいなく、長さ二十五メートル、幅五・七メートルのずんぐりした感じのこの船で、太平洋の荒波をこえて母港から三千キロも四千キロもはなれたところまでマグロを追っていくのだときかされたら、漁業のことを知らないたいていの人はきもをつぶしてしま



うだろう。

とはいえ、第五福竜丸はありふれた一せきの木造漁船だった。あのできごとにぶつかりさえしなかったら、第五福竜丸という名前は焼津の漁業関係者いがいに知られることはなかったろうし、船そのものもあと十年も働いたら、廃船となって解体され、それでいっさいのかたがついたことだろう。

それがそうならなかったのは、第五福竜丸が一九五四年三月一日の早朝、太平洋の赤道のすこし北側、マーシャル群島ビキニ環礁の東方約一六〇キロの海上で操業していたからである。のちになって多くの人が、〈もし第五福竜丸がそのときそこにいなかったら〉と考えた。これは歴史上の仮定だから、だれも正確に答えることはできないだろうが、第五福竜丸がそこにいなかったら真相は長いあいだかくされたままになっただろうし、世界中の人がそのできごとのおそろしい本質に気づくのはずっとおくれたことだろう。

つまり一せきの船が、しかも木造の小さな漁船が、世界の

歴史をかえたのである。こういうことはそうむやみにあるものではないが、第五福竜丸の二十三名の乗組員はだれも、自分たちがそんなたいへんなことをやっているとは知らなかった。彼らはまずしい漁民であり、生活のためにマグロを追っていただけで、自分たちがそんな大きな事件の当事者になったということは、焼津に帰港したのちに知ったのだった。

一九五四年三月といえば、日本が第二次世界大戦で敗北してから九年近い歳月がたっている。アメリカを中心とする連合軍による日本占領が終了したのが一九五二年四月で、それからかぞえても二年がすぎている。一九四五年までの長い戦争による痛手からはすこしずつ回復していたが、多くの日本人の生活はまだまずしかった。アメリカではどの家庭にも自動車があり、テレビや冷蔵庫や洗たく機があるなどという話が夢のようにきこえるのは、第五福竜丸の乗組員やその家族だけのことではなかった。

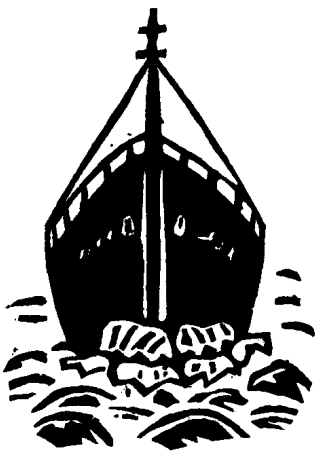
だがまずしい日本人は、そういうアメリカの生活をうらやましがりはしなかった。アメリカは強大な国なのであり、そこでの生活は日本人にとっては別世界だった。第五福竜丸の乗組員たちも、とにかく食っていくためにマグロ漁をしているのだったが、その強大なアメリカが自分たちに大きな災厄をふりかけようとしているとは思いもよらないことだった。

一九五四年三月一日朝、第五福竜丸はビキニ環礁東方の海域で操業していた。

1　ミクロネシアの悲劇

環礁とは、サンゴ島やサンゴ礁が輪のような形に連なり、その内側に礁湖という海水のたまった水面があるサンゴ礁のことである。阿蘇山のような二重火山が、外輪山だけが水面に出ていて、その外側は海、内側が礁湖になっていると考えたらいいだろう。そして外輪山がところどころ切れていて、海と礁湖とはつながっているのだ。

ビキニ環礁の礁湖はほぼ長円型で、長径は三七キロ、短径は二〇キロほどあるから、その面積は五八〇平方キロくらい。これは琵琶湖の五分の四の大きさで、礁湖としては中型だ。この礁湖をかこんで大小約三〇個の島があり、そのなかで最大のビキニ島とそのつぎに大きいエニュー島にはかなり以前から少数ではあるが、カナカ族の人々が住んでいた。ビキニ環



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

礁にはこれといった資源はないから、彼らは魚や貝、それにヤシの実などの果実を食べ、自然と一体になって原始的な生活をしていた。

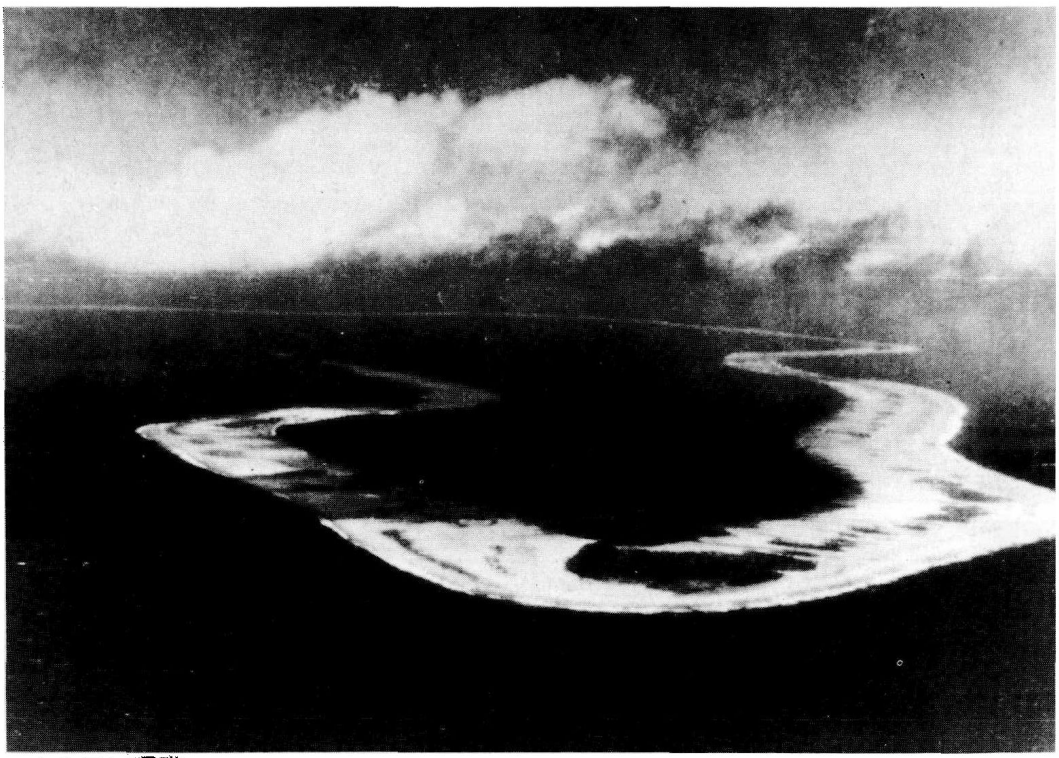
ビキニ環礁だけではなく、太平洋にはそういう島が多かった。太平洋の島々は、地理的にはポリネシア、ミクロネシア、メラネシアの三つに分けられている。ポリネシアはハワイ諸島とニュージーランドを結ぶ線の東側で、西側のうちビキニ環礁のあるミクロネシアは赤道の北、赤道以南がメラネシアだ。これらの地域の島々には無人島もかなりあるし、人が住んでいても小さな島だったら、そこでの生活はビキニ環礁での生活とにたようなものだった。

比較的大きい島のくらしにしても、いわゆる文明人との接触がはじまるまでは、小さな島での生活と大差はなかった。それは、文明人の目から見たら、きわめて単純素朴なものだった。

どこまでも青くひろがる太平洋に点在し、ゆたかな陽光にかがやいている緑の島々、そして熱帯性の気候のもと、あざやかな原色でいろどられている花や果実。そういう風土と、島の素朴な生活とが、文明人に太平洋の島々を「南海の楽園」と思わせた。「楽園」にあこがれて、島々へ渡った人のなかに、フランスの画家ポール・ゴーガンやイギリスの作家で『宝島』を書いたロバート・ルイス・スチーブンソンがいた。ゴーガンはポリネシアのソシエテ諸島のタヒチ島で晩年を送ってかずかずの傑作を描き、スチーブンソンは同じくポリネシ

アのサモア島に定住し、ゴーガンと同様に南海の地で死んだ。十九世紀末のことである。

外からは楽園と見えたとしても、そこに生きてきた人々にとってはかならずしもそうではなかった。自然条件にしても、いつでも生命の安全と十分な食料を保障してくれたわけではない。そもそも、大陸からはるかにはなれた島々に住みつくのも、たいへんな苦労だったはずである。太平洋の島々にはじめて人が住むようになったのは紀元前十五世紀ごろで、それから二千年後の紀元五世紀ごろまでに島々への展開は終わったと考えられている。そんな時代に、人々はどんな小舟で大洋を渡ったのだろう。海で死んだ人も多かったことだろう。だがそういう苦難をのりこえて、人々は太平洋の島で生きつづけてきたのだ。



ムルロア環礁

しかしやがて「文明人」たちが大きな船でやってくるようになり、その文明人が島の人々に新たな苦難をもたらした。一方で「南海の楽園」というイメージをふりまいておきながら、一方で文明人たちは楽園をぶちこわしていったのだ。ビキニ環礁の人々にとっての決定的な悲劇は、一九四六年にアメリカ人がもってきた。しかしそもそものはじめから、太平洋の島の人々にとって文明人は災厄の種だったのである。

ビキニ環礁をふくむマーシャル群島はミクロネシアの東部にあるが、そのミクロネシアを最初に「発見」したヨーロッパ人は、世界一周中のフェルジナンド・マジェランの一行だった。一五一九年八月にスペインのセビリヤを五せきの船で出発した一行は、南米を経て太平洋を西へむかっての航海の途中、一五二一年三月六日に、マリアナ群島のグアム島とロタ島を見つけ、グアム島に上陸した。このとき、島民が上陸者のボートや金具をもちさろうとした事件があり、マジェランはかんしゃくをおこしたらしい。なぜなら彼は、この二つの島を盗賊列島と名づけたからである。だがこのマジェランの態度は、不当なものだといっていいだろう。ヨーロッパ人と島の人々とでは、物の所有ということについての観念がちがっていたはずだし、そもそも島民からみれば、マジェラン一行は侵入者だったはずである。

鎖国中の日本へやってきた外国人が、ことわりなく海岸へ上陸したあげく、日本を盗賊島とよんだとしたらどうだろう。日本人は腹を立ててもいいと思うが、マジェランはまさにそ

ういうことをやったのである。盗賊列島と名づけられたことは文明人による最初の災厄だったのだが、のちにはそんなことではすまなくなる。

ミクロネシアの島々は十六世紀中のスペイン人のたびたびの航海で「発見」されてゆき、一五六四年にはマリアナ群島がスペイン領と宣言された。なお、マリアナ群島という名は一六六八年になってつけられたものだが、これは当時のスペイン皇后マリア・アンナにちなむものだった。

十七世紀末になって、「野蛮な」島民にキリスト教を布教すべく、宣教師が何人もやってきたが、これが大災厄の原因になった。宣教師たちは布教に性急になるあまり、島民たちの旧来の信仰や習慣を急激に破壊しようとし、これにさからった島民が宣教師を殺すという事件まで発生した。スペイン政府は、マリアナ群島の全部の島民を厳重な監視の下におくことにした。そのためには、島民がいくつもの島に分散していてはこまるので、マリアナ群島の全部の住民を最初はサイパン島とグアム島の二島に強制移住させ、ついで、最終的にはグアム島に全住民を収容した。こうしてグアム島いがいは無人島になってしまい、殺されたものも多数あったことから、住民の数もかなり減ってしまったのだった。

こういったできごとがあった十七世紀末から十九世紀末までのほぼ二〇〇年間、ミクロネシアの島々のうちではマリアナ群島をスペインが領有するだけで、他は領有を主張する国も

なく放置されていた。そして、捕鯨、貿易、宣教を目的として、アメリカ人、ドイツ人、イギリス人、スペイン人などが自由に往来していた。

マリアナ群島いがいのミクロネシアの島々が長らく大国の領有をまぬかれていたのは、一言でいえば領有する価値がなかったからである。ミクロネシアの島々は、がいして小さい。ミクロとは「微小な」ということで、ミクロネシアとはそもそも微小な島が多いところからつけられた名称である。ごく小さなものまで数えると一五〇〇にものぼる島々の総面積はわずか三四〇〇平方キロで、これは鳥取県の面積とほぼ同じというせまさなのだ。島が小さいこともあって資源らしい資源はないし、当時の海上交通路の主要ルートからもはなれていたので、各国ともわざわざ領有する必要はなかったのである。

しかし十九世紀後半になって欧米各国の支配圏拡大競争、つまり植民地獲得競争が一段と進行するのにつれて、ミクロネシアといえども放置しておかれなくなった。すなわち一八八〇年代において、スペインはカロリン群島を、ドイツはマーシャル群島を、イギリスはギルバート諸島を、それぞれ領有することを宣言したのである。一八九八（明治31）年にアメリカとスペインの間で戦争（米西戦争）が起き、アメリカの勝利で終わった。この結果アメリカは、スペイン領だったフィリピンとグアム島を獲得した。国力が低下し、太平洋地域から撤退せざるをえなくなったスペインは、さらにマリアナ群島とカロリン群島をドイツに二千五

百万ペセタで売りわたした。

それにしても、ミクロネシアを舞台にした列強諸国によるこの領有合戦は奇妙なものだとはいえないだろうか。彼らは無人島を発見して領有権を確立したわけではない。たいていの島には、すでに人が住んでいたのだ。それなのに彼らは、勝手に宣言を発して「領有」し、戦争の結果として、あるいは売買によって、領有権を移動させたりした。もともと住んでいた人々の意志とか権利とかは、列強によっていっさい無視された。

こういったことは、むろんミクロネシアでだけ起こったことではなかった。近世から近代にかけて列強が獲得したアフリカやアジアの植民地の大部分は、同じような過程を経て生まれたのだ。一つの国の中でも、同様のことはあった。「アメリカ人」は、インディアンを追い立て追い立てして、インディアンが暮らしていた土地を自分たちのものとしていった。幕末から明治にかけて、「日本人」はアイヌの人々がくらしていた北海道の土地をつぎつぎに占有していった。

たとえば外国人が日本へやってきて、勝手に日本を領有するという宣言を出したら、わたしたちはどう思うだろうか。さらにまた、外国人どうしが日本を売買したりしたとしたらどうだろう。

ミクロネシアの原住民の頭の上での領有権の移動は、まだまだつづく。一九一四（大正3）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com